

平成27年度 防衛大学校卒業式
防衛大臣訓示（聞取りのまま）

卒業生の諸君、卒業おめでとうございます。

先ほど、諸君一人ひとりが、國分学校長から、凜として、正々堂々真剣な眼差しで、卒業証書を受け取る姿を拝見し、防衛大学校で学んだことへの自信と誇り、無限の可能性と熱き気概を感じました。そして、諸君が今後の厳しい任務の中にあっても、人の上に立って、しっかりと組織を掌握をし、国民の負託に応えることのできる、強く、優しい、立派な幹部自衛官候補になったことを確信をいたしました。

「あしたに道を聞かば、夕べに死すとも可なり。」

ここでいう「道」とは、物事の道理、人の在り方であり、諸君は、ここ小原台で、いろんなことを考え、学び、大切なことを身に着けたと思います。

視野を広く開き、科学技術の考察を養い、豊かな人間性に処世の道を求めて、国家及び社会に責任を持った幹部自衛官として、その職責を果たし得る人格と技能を修める。

良き自衛官の前に、良き社会人であり、良き市民たれ。紳士であれ。淑女であれ。防衛大学校には、このようなことを身に着け、三つの大きな柱があると言われております。

第一は学生舎生活です。作法は人を作る。集団生活での学び、学生舎生活での規律。

理性と尊い感情は重んぜられ、服して威信を傷つけぬ慣行は、伝統となって、これを生活の誇りとする。

この共同生活は、個性を喪失させるものではなくて、むしろ、個人に真の自由を与え、自信と闘志を沸き上がらせ、友情と愉快的雰囲気の中での生活、営みを与えてくれるものです。

学生諸君、よくぞ、耐えて、自らを鍛え、磨いてくれました。

第二は学問と履修。学問は、妥協を許さない一つの規律であります。同時に、光明と力の源泉となります。防衛大学校のカリキュラムは、均整の取れた思慮分別のある人として成長してゆくことを目標といたしております。また、国家社会の基礎学の習得なしに、平和と国の独立

を守る仕事に必要なとなる、時局の正確な判断は不可能であります。

今や、現代は、イノベーションの時代です。技術やアイデアが、社会的意義のある新しい価値を創造し、国際安全保障にも、大きな変化をもたらしております。国家の防衛にも、その歴史と理論そして技術革新があり、これを学ぶことなくして、国家防衛という任務の本質を理解することはできません。

第三に、実働の訓練です。

皆さんは、校友会活動を続けてこられました。私は、ラグビー部に所属をしておりましたが、そこで学んだことは、「体で悟り、体で覚えること。」「体で悟った真理こそ、我がものになる。」ということなのです。

一国の平和と独立を守るには、規律ある部隊行動と共に、体力と精神力の鍛錬が必要です。これは、私が、自衛隊のレンジャー訓練で教えられたことではありますが、指揮官、特に上に立つものは、勇気と迫力、忍耐と、困難を克服する気力の育成に最善を尽くさねばなりません。

統率の要諦は、人に好かれること。判断を間違わないこと。職責を放棄しないこと、そして、国を愛する心。卒業生は、誰よりも、防衛という任務の尊さを考えなければなりません。

昨年、国会で、平和安全法制が成立をいたしました。

我が国を取り巻く安全保障環境は、ますます厳しさを増しております。アジア太平洋地域を含め、グローバルなパワーバランスの変化が起っております。

北朝鮮は、日本の大半を射程に入れる数百発もの弾道ミサイルを配備をし、核兵器開発を進展をさせております。今月十八日にも、北朝鮮西岸のスクジョン付近から弾道ミサイルが発射され、約八百キロメートル飛翔し、日本海上に落下をいたしました。現下の朝鮮半島情勢を踏まえれば、今後、北朝鮮が局地的な挑発を含む更なる挑発行動に出る可能性も否定できません。北朝鮮による核兵器及び弾道ミサイル開発の進展は、我が国の安全保障上、極めて強く懸念すべきものであります。

一方、我が国周辺海空域における中国軍やロシア軍の活動も大いに活発化をしております。自衛隊のスクランブルの回数は、十年前と比べて、約七倍に増えております。

東シナ海においては、中国が、公船による領海侵入を繰り返し、今月

十九日にも、海警三隻が尖閣付近で、我が国の領海を侵犯いたしました。

南シナ海においては、中国が、領有権について対立がある中、大規模かつ急速な埋め立て、拠点構築、軍事目的での利用など、現状を変更し緊張を高める一方的な行動を継続をいたしております。

ハリス・アメリカ太平洋軍司令官は、「中国は今まさに人工島を自らの軍事能力の前方展開のための作戦拠点に変えつつある。」と証言をいたしました。

今後、南シナ海においては、海警のほか、海軍や空軍のプレゼンスが増大をされる可能性があります。いわばA2AD能力これを向上させることで同海域における航行の自由が妨げられかねないなど、安全保障上の影響も否定できません。

防衛省としても、我が国の安全保障に与える影響を注視しつつ、いかなる対応を取っていくべきか、引き続き検討してまいらなければなりません。

また、アルジェリア、シリア、チュニジアでは、日本人が犠牲になるなど、昨今、ISILをはじめ、暴力的なテロ過激主義が台頭しております。最近も、トルコ、エジプトで大規模な自爆テロ事件があり、多くの市民が殺害をされました。

今や脅威は容易に国境を越えてくる時代となり、もはや、どの国も一国のみでは、自国の安全は守れません。

私たちは、このような現実の厳しいところから目を背けることはできません。政府としては、いかなる事態が起きても、国民の命と平和な暮らしを守り抜いていかなければなりません。国民の安全を守るために、必要な自衛の措置とは何なのか、これを常に考え抜き、あらゆる事態を想定をし、切れ目のない備えを行う責任があります。

また、日米同盟、これは我が国の安全保障の基軸であります。我が国に駐留する米軍のプレゼンスは、地域における不測の事態の発生に対する抑止力としても機能いたします。日本が攻撃を受ければ、米軍は、日本を防衛するために、力を貸してくれます。そして、日米安全保障条約の義務を全うするために、我が国周辺において、適時適切に警戒監視の任務に当たっています。平時からグレーゾーン、集団的自衛権に関するものも含め、あらゆる事態に切れ目なく、日米が一層緊密に協力をし、対応していくため、平和安全法制は不可欠な法律であります。

このような背景から、平和安全法制が国会において成立をいたしました。これにより、様々な危機に対する日米間の共同対処能力は飛躍的に向上し、もし、日本が危険にさらされるような事態が発生した場合でも、日米同盟は完全に機能するようになります。さらに、そのことを世界に発信することによって、紛争を未然に防止する力、すなわち抑止力はさらに高まり、日本が攻撃を受ける可能性は一層少なくなっていくと考えております。

この平和安全法制は、日本の平和を維持し、戦争を抑止するためのものであります。誰もが、世界の平和と無事を願っております。平和は最大の福祉であり、国民は、国が繁栄すること、物質が豊かで、心が豊かな、安楽な暮らしにあこがれております。

しかし、みなさん、災いは、忘れたところにやってくるものであります。そうであるからこそ、明日への備えが必要であります。今、目の前の世界が平穏に見えても、世の中の全てが平穏であるということではありません。突然のテロ、継続中の紛争など、今この瞬間にも、世界のどこかで緊迫した状況が続いております。

平素からの備えを行っていないければ、突如として襲いかかる災い間に合わないのは当然なことであります。

一方、平和な平素において、起こりうる脅威をしっかりと想定をし、これに備えることは困難なことであります。しかし、この備えを怠ったがゆえに、招かない難を招き、また、備えていないために、難が降りかかったことに混乱して、悲惨な状態に陥った事例は、歴史の中に数多く残されております。

自衛隊の存在は、将来起こりうる脅威に、平素から備えを行うためにあります。この難事中の難事を行うことに、隊員一人一人が使命感と誇りを持って取り組んで欲しいと思います。

さて、海外からの留学生の皆さん、卒業おめでとうございます。習慣も言葉も違う日本での勉学、大変であったと思います。先日も、東チモールの大統領がお越しになっておりましたが、皆さんと日本の友情は、永遠であり、本物の絆であると申しておられました。

皆さん。母国へ帰っても、世界の平和のため、ご活躍をされることをご期待しております。

皆さんが生まれた頃、1992年、自衛隊は初めて国連PKOへの参加・協力として、カンボジアPKOに参加しました。大変厳しい環境の中で、カンボジアの人々、国連のメンバーと力を合わせながら、道路を

舗装し、紛争後のカンボジアの復興のために力を尽くしました。

選挙後、カンボジアは、立派に国の復興を成し遂げ、現在は自衛隊と同じ国連南スーダンミッション、UNMISに医療部隊を派遣し、「支援される側」から「支援する側」へと成長されました。

先日私は、南スーダンに派遣中の相園隊長とテレビ会議で直接お話をしました。その際、相園隊長は、現地で起きた、次の出来事を教えてくれました。

日本隊は医務室を持っているが、歯科治療など日本隊の医務室では診療できないことについては、エリアの医療を担当するカンボジアの医療部隊のお世話になっている。各国のPKO要員も同様に、診察や治療が必要な時には、カンボジアの医療隊のお世話になっている。

その際、受診料については、自国の判断で派遣されている要員は、費用を徴収されるのが通常であります。しかし、日本隊だけはずっと、全ての隊員が無料で診療を行ってもらっておりました。

相園隊長は、そのことをずっと不思議に思っており、隊長自身がカンボジアの病院長に対して、なぜ日本隊だけこうした配慮があるのかと聞いてみたところ、カンボジア隊の院長はこう答えたそうです。

「20年前、日本はカンボジアを支援してくれた、そのささやかな恩返しであります。」

このことは、自衛隊が海外の現場に赴き、顔の見える支援を行ってきた種が、月日を経て花を開き、固い友情となり、また次の国造りを支える力となっていることを教えてくれました。

諸君は、将来、国際社会で活躍する人材となります。皆さんの行い一つ一つが、日本の信頼、国民の平和な暮らし、さらには、国際社会の平和と安定に、確実につながっていることを忘れないでください。

最後に、「体で悟った真理こそ、我がものなり」

卒業生の諸君が、ここ小原台で学んだことを、いろんなところで実践をし、活躍をされること、そして、ますます、自己研鑽をされ、それが、生涯を貫く本物の真理となることを祈念をいたしますとともに、

本日まで、学生を育て、見守り、ご指導、ご援助いただきました、ご父兄、学校関係者、ご来賓、外国政府、関係省庁、協力団体をはじめ、多くの協力をされた皆様方に心から御礼と感謝を表明を致しまして私の祝辞とさせていただきます。

平成28年3月21日
防衛大臣 中谷 元

卒業おめでとう！